

十日自ぬきぬりてぬく結ぶ ○二月廿二日重徳方子より五百奉出忌

○二月十八日より五月廿八日まで浅草より親世名寄帳 貞享三年より廿三年因あり

○二月十三日安後東野卒 号本壁林仁堂三十七才あり楊協福其子虎山著

○江戸町火消い方は組よりまる ○五月浅草より本堂修葺十万人

撰始 月六年五月小 ○浅草法蓮寺の第六天社今年災ふ罹り今の

地へ入る ○九月朝鮮人本陣 正徳供致申副使黄階後事李明彦等あり孫吉初末本籍あり朝鮮人曲ると

○九月十日 韓人遣 幸町家院をよりお火事八丁

坊辺野焼 ○十月村吉島町本座又七と云りの赤川宿の町人をうこ

らひ所殿山の上より小探せ居を元とる 辰登八言五擲名歌ありの同十八のより二月の男無りせ

○十二月九日能入天姥松隣卒 号五吾居村吉町新光昭子小葉也

享保五年 庚子

二月廿五日堺島郡大お孫大雲と焼亡 おわさか

○二月廿七日午半刻流島町よりおと南風烈々々海り町日本橋

を伝る町を喰町を越神田辺和泉橋下管上殿坂本合杉其の端

をより通る ○上野二五門法蓮立

○七月廿二日儒所中村持謙卒 五十四才名鑑善深川要澤より著

○八月園東波あり ○八月町火消の纏弁より組の方城を元とる

長七尺の吹流を中又提を元とる おんげを副由

○八月十八日儒所務頭林敬卒 号持平合平の男 ○九月十日大風

○今年冬冷泉中納言為徳江法系向あり鳴高女伝遍出あり

子あり

○洞房澤電燈寫本 乃乃及於編
板中の元文三年之

○吉系丸鑑六冊成 乃乃及於編
板中の元文三年之
謀非他と云

享保六年 辛丑 七月望

正月八日昼時時是後町よりお火あふ火大風通き丁目より系橋
本材本町八丁堀本橋町後炮海築地靈巖寺銀町まで焼く

○二月二日辰午刻之河町に丁目裏町よりお火あふけ神田を丁目
上流に東門焼滅す町に皆まて焼亡

○二月四日己刻之身込込納戸町よりお火あふ日向小石川辺一系小燈
白山の辺より二橋もありの日暮里まで焼く此時傳通院へ逃入焼
死する者二百八拾餘人 一基の橋を
たふさるあり 築土八幡宮白山社も時
焼く傳通院災後敷者皆房澤澤土意く法再興あり

○同寺並みあつてお火消在安小川町へ引りこらり

○二月十五日金曜工柵川改次率 柵川の
祖より

○二月廿日水府彦治傳医吉田林彦率 八十七才年中大檢と云葉は義子
は敷享保十年己九月率せり

○二月十二日水府彦治傳医吉田林彦率 号儼整

○二月法社の系袴の時彦彦と名つけたる物をおひり法彦あり

○五月神田橋法門初め於る古林見宜醫者講治始 法彦所
祖より

○六月十二日 三十七日 茶人懸宗知率 号玄家子下谷彦率
中橋雲院小茶人

○書物圖書定るお 号玄家子下谷彦率
中橋雲院小茶人 ○六月二日傳作腹於保庸率 孫友也所号實父母
若行谷徳雲と云葉は

○七月廿一日藪町八丁目通より妻に十は女會所同率小痛合利
をかひ新町お火あふり又一顆をかひ翌年壬寅六月朔日其お
又一顆をかひ壬寅小室金龜奉り里中の人皆泣く觀を

○小石川清草堂を不養せし所建十二月より貧困の病を治めし
其解をよめり 此所の板を割刻板のいへりて是より後上原病入板と
り記名人は通院病恒居の医師小川寛政と云ふなり

享保八年 癸卯

二月十六日赤坂傳馬町より火火為如風烈やく其病の久保延焼す
武蔵方町を額焼野 ○二月十五日より三日のり中村勘三郎
其居百奉の書札を彩後致意を致様若大名等を具行に

○二月廿二日水戸に去龍率 七十四才文山の足能也とあり
附より津澤運院不葬也

○二月廿九日能人志村玄倫率 六十三才

○三月十九日折奉人磨千奉忌 二月廿日自負不折奉社へ
三徳橋在大原郡と傳をよ

○元禄銀室と水銀中銀の二宝銀印の宝銀通用止

○五月十日新井明卿率 白二男 孫傳為法法
被奉中と傳と云ふ事

○六月陽原深井秋水率 八十二才

○七月廿六日池上奉門中奉堂再建入佛供養 宝永年中焼亡の後
廿二世日没上人再真

○八月近在かあり 音羽町九丁目青柳町カカ池取拂ありの時
春女あり

○十月十日湯崎天満文造營進 野とありて昭や
音羽のころと云

○十二月十日狩野潤春福伝率 ありと
秀哉

同九年 甲辰 己月室

○正月十二日英一様率 七十一才二年校義教中敷重院不葬以釋世
まねくは浮世のよさの色とくも有く必や不葬の月

○正月廿九日水戸町より火火事八夜月町本木換町まで焼く事

口出門焼失くす六の後済再建 本換町火火
屋敷に在り

○為久保八幡宮を奉の災後修造済去花造不ありとむ

○甲府清城番始る○二月細詳 奉郷より火災築北近焼亡

○六月七日特許水取之伝率 六十才

○六月廿五日東郡毛除長廿敷十尺小堀りもあ一色目くろの
尾の細きところ○八月清茂前札尻百九人小定くる

○十一月廿一日能入二世の立忘率 清系及藤
千葉氏

○寛和通曆刊行 系仲根
之圭編

享保十年乙巳

二月十四日青山之保町より火災赤坂に谷市谷平込大塚多羽
小石川道勝弱込谷平下管合村まで焼亡

○二月廿五日五百羅得堂再建結半成就す 是家先和尚元祿の末より
市井を勧化ありしゆきり

○二月十九日能入爾后亭秋之率 神世
見一巻のさめても色のうきり

○五月十九日官儒新井白石先生率 六十九才名譽字名義
後学被譽し申す徳よし小葉

○六月廿二日古筆六代り青率 五十二才

○七月廿日津路陽信一寸見河東氏 五十二才天後屋敷子而本形も市橋
ち小葉氏を以て建てる碑五十二日と存る難之

○九月二日冬島良辰後代忠死 大島兼の小うさふりるを良辰大島のり
い原川島江町小居一養枝と号し

○十月大判出吹替元祿大判止忠盟多又出吹替あり

○今年長身の人志賀随氣 百七十
八才 小石勅吉忠 百
二才 俵後市吉忠 百十
八才

石井勅吉忠 百二
才 沼田伴虎 百一
才 水野徳中忠辰 九十
二才 柴田十吉忠 九十
二才

中葉長身系 九十
三才

同十一年 丙午

二月七日能入生玉葉凡率 号如葉子後架押下
去葉よし小葉氏

○二月廿日能入家女率 六十二才利葉一と知護とあり
吳葉と申念公第後地小葉氏

○二月廿九日傷所去犯黙子孫自親居士と号し

○今年五穀豊穰あり○圓向院より桂系那赤尾天照山大吉寺

朝日如來宗帳○五月廣草小揚こあげの理を擧げ元々人の老母不仕く

斎持の事ありて慶賞をのぞく崎人村年山 紀伊并あり

○六月廿日郷人の間占連率六十二才男合款呈 廣草揚りたる事

○今年より十七年まで深川十萬坪小治子清淺あり元々元来五月あり 日におき清淺あり

○十一月十八日大道と友山翁尚齒令志安隨翁と藤六人の 翁令とらと云姓と事詳

享保十二年 丁未 正月宣

二月朔日夜五羊時光相束より病に死すの如く

○本撰町東女ら束る協あり

○南田川本母も梅老九七五十年忌辰二月十五日 たり辰辰

○まき尾徳集おちが 細長村友山翁八十才 編翌年退老成る

○五月十二日能人宮野百里早雷六十二才多田中 別當東江小葉を 釋世の白 死て迄てとら 一月をたつとら

あつて明を多の 一 室唐七年七月六月お及豫ら 田舎全中松海波小治子

○六月十旬より年別書取右非宮野周かんせ常陸必行波大杉大郎

花梅りあつて芝流群集一 万友家と彦結おをぬ 彦藤あり

搖の衣敷を忌 一 糸指を祖あり 此年を信

○倉原定林年月日 未詳○十一月七日村林本町白子倉原三希養子

又四男妻つたまるる代忠八刑せ

○十二月十日表二番町よりかき統町永田町鹿の宮虎の池門久保

町あり中橋上も妻門を焼くまて焼亡是より統町より通り

此代と成る○十二月十日能人志邑佳凡年四十四才 約止 大徳と事詳

○十二月由桑名川堤廣うるふ由坂小石川小日向辺大なる所形をた
自中あつぬむり

○九月晦の備作降後好義齋率 名邦達 泉井寺小集

○十月に日蓮谷日守寺小鬼子母作像を安置す 日法上人他縁會 役人藤田末傳末

○江戸社社志記刊行 荒井志敷 編

享保十三年己酉 九月間

○八月廿七日國學若松跡於光海率 名臣興務辰内七十一才 青山玉窓寺小集

○二月十六日飯田町坂上武家方より火入 合田宗友 田安内門并於燒の

取用池小燬る ○五月交込國の鄭大威より東有廣南國の廣大衆

源也 去年六月長湯(北社二匹を海を北の長湯お終て歸る今年に月社二匹を大坂へ 牽来り同日系於(入大内)牽く五月廿五日に於て終て北中社小あり(實是年

小覽るは曾今の中社室家来りありこの時次第あり 備神家のは舟あまのありし中世小集家来り終ていひ

作の業をうけしものまじやこ一とせむもまじぬ津代とて 鳥丸 老業に

この時中村三迫り編の老の首自林屋より老首珍記又編老の首志たどりやま
を形せり江戸の能人仙雀うらふ 今やひくは士の種神くこつむり
しと正をこれの時統町より大衆の能り
おきりて事この時のまねびありり

○十一月廿二日書お後於保考率 号警彦翁 孫清助 甚務彦徳雲と小集

同十五年 庚戌

○正月江戸町火消に十七組を十組小定する 目下お暴の弱形あり纏の吹流 止ておとんを付この附小組に十

七組あり後小本組を来て四十八組と成小懐止く返く 小纏を第の大纏小まこひともし 粘糸溜たり

○二月十八日原見十方堂の事自体終 カ十方本は行町 流光と小集

○二月本醫室證廿五冊刊行

○二月本坂水川河神合井堂の移さる社法建あり廿六日延文有

○今國八幡文殿損ふり川て春多七上家信を信りて五月十五日より

○十月十二日蓮上人百五十年忌法會あり

○十月十二日耳落降（録後八二本） ○十二月十九日儒師右田希賢卒

義教子
小華也

享保十七年 壬子 五月

正月十二日儒師矢野極齋卒 名義子 孫理平 西河流景子小華

○二月十二日兜室下青松寺より兜室新橋と焼同日小石川白山

より火松平甲お彦邸おひりり

○二月増上寺柵門内子聖指規勅請

○二月廿八日清原宗平統門前よりお入清原宗平岩辺守社町方

焼亡 は焼原系火除のころお孫屋町藤原町福屋町おひりり町屋を 百十とまお田系お智地を下りぬ

○非田殿非橋門再建立 町より非田の徳入利の二かきを見接り合三百西を 収むを服会お町人より寄附をりて建立し

○浅草寺命院より上取新田医事職せ末所冥帳

○岩船地院より同多中冥帳 ○天下肌腫疫癘行り

○六月十二日頼房松凡卒 八十六才再年教中 浅橋寺小華氏 ○七月廿一日儒師平野

金華卒 は十五才林源官為の為とち和店 華老とち華氏文雅先代と流

○冬流翰名人藤平光寿卒 八十才非田お居せり翰の空とりのお高味を丹紙し けり近世の御書ありて今も老あつ流りする

○若くお流流 形見入るは編寫中あり書安 兼慶のけり世上の風儀を述るる也

○江戸お子初輯流七巻刊行 兼慶正原の編あり後流初おひりり書方 恒る初流補正再刻し今以て世に流る

同十八年 癸丑

まき清若守奥山小杉樹を栽 ○正月系酒林信元日暮春里流防養

お入りて十二景の流あり 十二景の流後流流 後父遠新 流華川夕照 権重村 田家 金子源林 平塚流 流流流

藤井夜鳥 黒髪山抄堂 中里龜流 西京晴嵐